

kurabeteyomu - MAR01_16.20170106 - 解説動画の文字起こし (Vrew/Whisper) 文章化 (Grok 3 Think) Kanno Kazuhiko

マルコ福音書の分析 1:-16:

マルコ福音書の1章から16章全体を、やっと分析し始めてだんだん見えてきたところです。私たちはこれを6つの段落に分けて見えています。そして、この6つに分けた段落がどのように繋がっているのかを考えています。

最初の4つの段落、つまり1章から8章までは、荒野やガリラヤでの出来事が描かれています。それが11章からはエルサレムに入り、宮（神殿）での話に変わります。このように、イスラエルの国全体に関わる話と、イスラエルの都であるエルサレムに焦点を当てた話という風に分けられているように思います。

最初の段落、1章から3章では、イエス様の権威と哀れみが表されています。例えば、十二弟子に権威を与えたり、パンを多くの人に食べさせたりする場面があります。また、十字架と復活を予言する部分も含まれています。その後の段落では、宮での裁き、十字架、そして復活が描かれ、これで合計6つの段落になると思います。

これらの段落をグループに分けると、権威と信頼というテーマが見えてきます。具体的には、最初の3つの段落（1章から3章）では、イエス様の権威を信じるのか、信頼するのかが問われています。これはたとえば話（知恵）、力ある奇跡（力）、そして預言や律法（王の知恵）といった形で示されています。一方、後半の段落では、言葉や天からのパン、つまり教えを通して「知る」ことが強調されています。このように、最初の3つは「信じる」こと、後半は「知る」ことがテーマとして並行しているように思います。そして、この「知ること」と「信じること」の2つが、義なる神の御国で民に要求されていることだと考えられます。

さらに、前半の4つの段落を2つずつの組で考えると、1章から3章と6章から8章に分けられます。最初の組（1章から3章）は弟子を作るところ、つまり弟子にすることに焦点を当てています。次の組（6章から8章）は弟子を導き、教え、訓練することに重点が置かれています。どちらの組にも「権威」と「言葉」という要素が共通して見られます。

最初の組（1章から3章）では、イエス様が王であり、エジプトから民を連れ出した救い主であることが強調されています。そして、十二人を選んで弟子にすることで、彼らも共に王となるという意味が込められています。これは十戒の1番目、「わたしはあなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した主である」という言葉に対応しています。一方、6章からの組では、主である神が偶像や他の神々に仕えることを良しとせず、主に仕えて主を愛するならば、命を捨てて従うことで次の世代まで恵みを得られるというメッセージが込められています。これは十戒の2番目、「あなたはわたしのほかに他の神々を持ってはならない」という命令に関連しています。

つまり、1章から3章では、エジプトの奴隷の家から民を連れ出した主であり、他に神はいない、他に王はいない、王の王であるということが示されています。一方、6章から8章では、偶像を作ったり他の神に仕えたり、他の教えに騙されたりしないように警告し、主を愛し命令を守る者には恵みを次の世代まで施すと約束しています。この「主を愛する子を救う」というテーマがここで強調されているのです。

このテーマは、サタンとの戦いの場面でも出てきます。例えば、マタイ福音書4章でイエス様が申命記6章を引用して「主を愛しなさい」と答えたように、マルコ福音書でも同様のメッセージが見られます。また、イスラエルの民が40年間荒野で導かれ、天からパンを与えられたように、それは神が彼らを試し、命令を守るかどうかを確かめ、心の内を知るためでした。同じように、主は弟子を訓練し、主に仕えて愛することを要求しています。

十戒の1番目と2番目は、「私たちの主は王であり、義なる憐れみ深い王であり、救い主である」ということを表しています。これは、マルコ福音書のテーマである「へりくだって仕える者となってくださる憐れみ深い王としてのイエス」と一致している点で、とても興味深いところだと思います。
